

市史編さんだより



(7)

出産と命名

子どもが生まれると、どの子どもにも名前がつけられ、親戚や近所の人を招いて名付祝が行われます。古くから日本人は、子どもの誕生には超自然的な力が働くと考え、すこやかな子どもの誕生と成長を願って、さまざまな儀礼や祈願の方法を発達させてきました。

東村山では、まず女性が妊娠しますと、東大和の塩釜神社にお参りして白麻をもらい、これを腹帯の間に入れて安産を祈ったといえます。また、妊婦の食事や生活にも注

意をはらって、「ホウレンソウを食べると血が荒れる」「辛い物を食べると流産しやすい」「火事を見て腹に手を当てる」と赤いアサの児が生まれる「など」といい伝えてきました。

東村山では、まず女性が妊娠しますと、東大和の塩釜神社にお参りして白麻をもらい、これを腹帯の間に入れて安産を祈ったといえます。また、妊婦の食事や生活にも注

うな人があったとき、その人の名をもらう。⑤男児の場合、出生順につける。一郎、二郎、三郎など。⑥鬼子母神を信仰している人はアグリという名をつける。⑦当時の偉人の名をつけてあやかるうとする。⑧俳優とかドラマや小説の主人公の名にちなんでつける。

①家代々に伝わっている名の一字をとる。②男児のときには祖父の名にちなんでつける。③神主などにつけてもらう。④村内に皆から尊敬されるような命名法があったようです。

オシチャの目には、またセツチンマイリといって、オムツを二つ折りにして頭にかぶらせた子どもを産婆さんが抱いて、便所につれていきました。便所には美人の神様がいてとされ、子どもをその神に披露し、あわせてすこやかな成長を祈願したのと思われま

もを特定する記号ではなく、家族のなかでの子どもの位置づけや、親の希望や願いが込められていることがよくわかります。名前がつけられま

民俗担当 上野和男